

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年7月19日発行「補習校だより」第14号より抜粋

一つの段落では一つのことを述べる。

書いたことを他人に電話で話す場面を想定し、聞き手が「なるほど」と相づちを打ったり、「いつ?」「どうして?」などと質問をしたり、「それで?」と先を促したりするところで行を変えると、一段落一事項になります。

このルールは、文章の種類も学年も問いません。小学生が生活作文を「 月 日のことです。」と書き出した場合、中学生が論説文を「イギリスの学校制度について述べます。」と書き出した場合、いずれもこの一行だけで改行することになります。井伏鱒二の「山椒魚」の冒頭は、「山椒魚は悲しんだ。」、向田邦子の「字のないはがき」の冒頭は、「死んだ父は筆まめな人であった。」という一行で改行しています。

文末の表現を多彩にする。

文末の文体を統一すべきことは、 で述べました。「デス・マス体」「デアル体」「ダ体」を混在させないということです。だからといって、すべての文末が「.....です。.....です。」の連続では、文章が単調で、味気ないものになってしまいます。「ます」「だった」「のだ」「のである」「ではないだろうか」「と思われる」「のです」などでも同じことです。

「遺跡に着いた。 a 真夏の太陽が照りつける。 b 時間が止まっているのではないか。誰もが圧倒され、 c ただ見入っている。」

書かれている内容は過去のことから、「照りつけていた。」「時間が止まっているようだった。」「ただ見入っていた。」となるところですが、このようにすれば現在形(a・c)が臨場感を、反語(b)が感動を表すとともに、文末が単調になることも避けられます。

15カ条を初級・中級・上級に分けていますが、 を初級とし、この を上級としていることが納得していただきましょう。

語彙・語法に、読み手の注意を引くものを交える。

15カ条の最後となる本項は、簡潔(すっきり)・明快(はっきり)・達意(伝わる)に加えて、楽しく、豊かにということです。要するに文章のお洒落ということです。

これは書き手のセンスや美意識に関わることから、簡単に身につけるわけにはいきません。しかし、常にそういう意識をもって接するなら、新聞記事・広告・テレビドラマの台詞等、トレーニング材料はどこにもあります。

子どもの場合は、家庭で日常接する言葉が重要です。マザータングの役割は実に大きなものがあるのです。

日常の会話を超えた語彙・語法を身につけるには、それに応えてくれる本を読むこと、そして、よい日本語の遣い手となるよう努めることです。子ども達の国語学習では、音読・作文・視写・漢字に励むことがそれにつながります。